

氏名	すずき ひろゆき 鈴木 博之
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第389号
学位授与の日付	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	川西民族走廊・チベット語方言研究

論文調査委員 (主査) 教授 吉田 豊 教授 田窪行則 教授 梶 茂樹

### 論文内容の要旨

本論文は、チベット文化圏の中でもっとも言語間の関係が錯綜している地域の一つである中国四川省に分布するチベット語方言について論者が行った過去4年間、前後10回に及ぶ現地調査の成果をまとめたものである。

中国四川省西部には一般に川西民族走廊と呼ばれる地域がある。この地域では近年、従来十分には知られていなかった多くの少数民族と彼らが話す言語が調査・報告され注目を浴びている。それらの言語は川西走廊諸語と呼ばれている。一方でこの地域ではチベット仏教が信仰され、チベット文化圏に属している。そして川西走廊諸語以外にも多くのチベット語の方言がこの地域では話されている。これらのチベット語の方言はチベット語の変種であるという理由から、川西走廊諸語に比較すると、これまで必ずしも注目されて来なかった。しかし、この地域で話されているチベット語は、既に知られているチベット系の言語と比較したとき、多くの相違点を示すとともに、その違いが従来のチベット語に関する理解に変更をせまるという点で非常に興味深い方言群である。

本論文は6章からなり、第1章から第3章までは、川西走廊のチベット語全般に関する先行研究、地誌、分析方法などの基礎的・一般的事項を整理したものである。第4章から第6章では個別の方言、個別の事象や資料について具体的に記述し分析する。以下に、章ごとの要旨を述べる。

#### 第1章 チベット言語学の研究方法

チベット語を対象とする言語学的研究の先行研究を俯瞰することで、現在までのチベット語研究の状況と問題点を明らかにし、本論文の議論の方向性を提示する章である。具体的には、記述的研究・歴史的研究・方言地理学的研究の3つの主要分野についての先行研究を整理する。それにより川西民族走廊に分布するチベット語方言については、現在に至るまでわかかな方言しか報告されたことがなく、漠然と種々の方言が存在し、複雑な分布を見せるということが知られていたのみで、ほとんど研究らしい研究が行われていない状況が明らかにされる。

#### 第2章 地理と分布言語

本論文で扱う川西民族走廊について、地理と地形、および歴史の概略を述べたのち、川西民族走廊に分布するチベット語の方言に関して、個別の方言の名称、分布地域、先行研究で扱われた地点などに関する情報を整理する。その際論者は、川西民族走廊でチベット語分布域と非チベット語分布域を分かち南北の線があることを指摘し、それを「九香線」と名付ける。この線の南東側にはチベット系の方言は話されていないが、それらのチベット語に属さない川西走廊諸語についても、具体的な言語や方言、分布地域、先行研究で扱われた地点など基礎的な情報をまとめてある。この地域の複雑に入り組んだ言語状況を勘案すれば、単にチベット語の方言だけを調査・研究するだけでは十分ではないことは言うまでもない。

#### 第3章 音声分析と記述方法

各方言の記述に際し、本論文で採用される音声分析と記述方法の特徴が説明される。論者による分節音や声調の記述は他の研究者たちのものと比較すると、必ずしも同じではない。従来採用されている記述方法の問題点が指摘されるとともに、

論者による方法の妥当性と有効性が説明されている。

特に問題となる点は、音素設定の方法、子音連続の記述方法、声調の取り扱いである。論者は分節音の音声特徴をできる限り忠実に表記することの有用性をことさらに強調する。体系的や経済性などの観点から、発音の特徴の一部が示差的ではないとして捨象され、簡略に表記されることによって、資料的価値が著しく損なわれるという主張がなされる。従って機能負担量がきわめて低い音であっても、借用によるものであることが確認されない場合には、音素と認定することが妥当であるとする。また子音連続の分析では、子音連続を構成する子音自体は同じでも、その聞こえの違い、すなわち明瞭に発音するか、極短く弱く発音するかの違いは重要で、方言話者たちが、各方言間の差違の指標にしていることを具体例をもって示している。ちなみに論者が発見した、子音連続の発音の微細な差違が重要であるという事実は、後に別の研究者によっても確認された。声調については、各音節が独自の声調を持つように見えて、その実は二音節からなる語彙の場合など、調値の揺れは激しく、音節声調ではなく語声調として分析すべきであると主張する。さらに、北部の声調を持たないアムド方言と南部の声調を持つカム方言の中間に、緊喉化した音節とそうではない音節を区別する方言が存在していることも明らかにした。論者はその違いを便宜的にレジスターの違いと呼んでいる。

#### 第4章 各方言別の音声分析と記述

本章では25種類のチベット語方言の音体系について記述する。それぞれの方言の項目は、当該方言の分布位置、音素体系一覧、各音素を含む語彙の具体例からなる。さらに特に重要な情報として、各方言に観察される子音連続にどのような種類があるかも具体的な語彙の例とともに示されている。

本章で取り上げる25方言を、チベット語の大まかな方言区分を用いて分類すると、アムドチベット語2種、ヒヤルチベット語7種、カムチベット語16種となっている。それらのうちアムドチベット語 dMarthang 方言及びヒヤルチベット語 Ketshal 方言は先行研究に報告があるが、それ以外は論者によって初めて記述される方言である。ここで言うヒヤルチベット語とは論者が発見した方言群で、声調を持つという点でカムチベット語に近く、複雑な子音連続を保持するという点でアムドチベット語に近いという。

なお本章で扱われる方言は以下の通りである（かっこ内は上述した方言群の名称）：Askyirong 方言（ヒヤル）；Babzo（ヒヤル）；gTsangtsa（ヒヤル）；Phyugtsi（ヒヤル）；sKyangtshang（ヒヤル）；Ketshal（ヒヤル）；Thangskya（ヒヤル）；rNgawa（アムド）；dMarthang（アムド）；sProsnang（カム）；Sogpho（カム）；dGudzong（カム）；Lhagang（カム）；Rangakha（カム）；Grongsum（カム）；nDappa（カム）；Sagong（カム）；gDongsum（カム）；Ragwo（カム）；Rwata（カム）；sDerong（カム）；rGyalthang（カム）；Nyishe（カム）；Budy（カム）；Yungling（カム）。

#### 第5章 類型的分析と地理的分析

本章では川西民族走廊に分布するチベット語の分節音と語彙形式について、地理的分布の観点から分析が行われる。論者は項目ごとに言語地図を作成して、言語特徴の分布を示した上で、解釈を行っている。提出される言語地図はほぼ100枚に及ぶ。

第1節では、先行研究がしばしば方言帰属の指標として採用してきた数詞を取り上げ、数詞の形式の一部をもとに言語地図を作成して議論を行う。その結果、第1にチベット文語で sh/zh で表記される音の現代の方言における反映がそり舌音になる地域があること、第2にチベット文語の軟口蓋音字+足字 y に対応する形式が歯茎摩擦音になる地域があること、第3に、他の方言と比較して特異な形式が川西民族走廊の北部と南部の地域で共通する点の3点を明らかにし、以後の議論において言語地図を作成する際の参考とする。

第2節では、主として子音連続のパターン・有声阻害音の現れ・超分節音素の存在と調音パターンの3点に注目する。

第3節では、チベット文語の形式がどのように反映されるかの考察を行う。調査される要素としては、チベット文語の sh/zh, P 類（すなわち両唇閉鎖音）、Py 類, Ky 類, Pr 類, C 類（すなわち歯茎・硬口蓋摩擦音）などであり、それらの方言における対応音について、言語地図を作成しつつ考察を加える。その結果、類似の反映を示す方言群が存在すること、一方でそれらが必ずしも地域的に連続しない分布を示すことなどが確認された。

第4節では、川西民族走廊のチベット語諸方言のなかでは特殊な音素と判断される口蓋垂閉鎖音、無声唇歯摩擦音、硬口蓋閉鎖音、硬口蓋摩擦音などについて、それらの要素の有無を地図化して提示する。これらの特殊な音は、共通の語源を持

つ特定の語彙に限って現れるというのではなく、方言ごとの個別性の高い特徴であることが明らかになるとする。

第5節では、語義を基準にして40枚の言語地図を作成する。チベット文語に対応形を持たない語彙も含まれ、それらは特定の地域に限定される一方で、周辺の非チベット語とは共通するという点で地域性の高い語彙であることも判明する。

最後の節では川西走廊諸語に見られるチベット語からの借用語の形式を基準として、実際に分布するチベット語方言の形式と対照する。その結果、一部の語についてはどの方言から借用されたかを特定することができ、言語間の影響関係に関して歴史的な分析を行うことができることが分かった。具体的に明らかにしたことには、スタウ語やダバ語に見られるチベット語来源借用語が丹巴県にのみ分布するチベット語の方言形式を示している点、ペマ語の多くの形式が九寨溝のチベット語と共通する点などがあげられる。

## 第6章 歴史的な分析

中国の明から清にかけて、周辺民族の言語の主に語彙を記録した『華夷訳語』と呼ばれる文献が作成された。そこでは各言語の語の発音は、当時の漢字音を利用して音写されている。第6章では、そのうち18世紀なかばに作成されたいわゆる丁種本の『華夷訳語』の『西番訳語』に記録されたチベット語の方言形式について記録当時の発音を再構成し、その結果を利用して形式の類似する現在の方言を特定するとともに、記録が行われてから後約250年間の言語の変遷を分析する。

丁種本『西番訳語』には9種類の言語が記録されているが、そのうち4種類がチベット語の方言、残りは非チベット語すなわち川西走廊諸語であることが明らかにされている。論者は序文に見られる当時の地名から、現代のどの地域の言語が記録されたかを示す地図を作成する。そして論者が調査した当該地域で話されている現在の方言とどのような関係にあるのかを考察した。

その際、先行研究の研究方法を改め、音写に使われた漢字の発音として北京官話のそれではなく、四川で話されている西南官話の漢字音を利用した。当時、北京から派遣された役人ではなく、現地の人が記録にあたったという事態を考慮した処置だが、結果としてより現実に近い音価を推定できるようになった。そして、既存のチベット語方言に関する知識では説明できないとされていた語彙形式が、西南漢字音を使って推定された再構形と、論者が収集した関連地域の方言の形式を利用することによって、非常にうまく説明できること、またそれによって250年前に実在した形式と現在の形式を比較してその間の変化を考察できることを明らかにした。

## 参考論文と別冊資料

本論とは別に、上述の4種類の内の2種類の『西番訳語』について、漢字音から原語を再構成する手続きや、再構成された語彙形式と論者が収集した方言の語彙とを比較し、250年前に記録された方言が現在のどの方言に近いのかといった問題を扱う論文が参考論文として提出されている。さらに別冊資料として、24方言、総計25,000語あまりの語彙データが分類語彙資料集として提出されている。該資料は今後この地域のチベット語方言のみならず、他の川西走廊諸語を研究する際に利用される必須の工具となるであろう。

## 論文審査の結果の要旨

中国四川省西部には一般に川西民族走廊と呼ばれる地域がある。この地域では近年、従来十分には知られていなかった多くの少数民族と彼らが話す言語が調査・報告され注目を浴びている。それらの言語は川西走廊諸語と呼ばれている。一方でこの地域では川西走廊諸語以外にも多くのチベット語の方言が話されている。これらはチベット語の変種であるという理由から、川西走廊諸語に比較すると、これまで必ずしも注目されて来なかった。しかし、この地域で話されているチベット語は、既に知られているチベット系の言語と比較したとき、多くの相違点を示すとともに、その違いが従来のチベット語に関する理解の変更をせまるという点で非常に興味深い方言群である。そもそも本論文は、この点を豊富な資料によって如実に示した最初の研究であり、川西民族走廊に分布する多数のチベット語方言を論者自らが現地調査し、その結果をまとめたものである。論文の本体以外に、別冊資料として24方言、総計25000語あまりの語彙データが分類語彙資料集として提出されている。なお論者による現地調査は過去4年の間に10回にわたって行われた。

論文全体は6章から成り立っており、前半の1～3章は、調査対象の地域についての概観と、チベット語の方言についての従来の研究のまとめ、論者の調査方法の独自性の説明にあてられている。後半の4～6章では、論者による調査と研究の

成果が提出されている。具体的には、まず4章で調査された25方言の音韻体系と各方言に特徴的な発音の説明がなされる。つづく5章では発音、語彙などの特徴が川西民族走廊地域のチベット語方言にどのように分布しているかが言語地図を使って分析される。提出される言語地図は98図に及ぶ。最後の6章では今から250年以上も以前、清朝時代に川西民族走廊で作成されたとされる、いわゆる丁種本の『華夷訳語』の一つである『西番訳語』に収録されたチベット語資料と、論者が調査した方言との比較・対照が行われる。論文の本体と別冊資料および参考論文の形で、非常に豊富な新資料が提出されるとともに、その資料に対する克明な分析が為されていることは高く評価できるであろう。以下にその中でも特筆すべき貢献について説明する。

1) 論者は鋭敏な聞き分け能力により、方言ごとの微細な発音の違い、とりわけ語頭の子音連続の発音を記述している。その違いは微細ではあるものの、母語話者たちはその違いに敏感であり、話者たちの間では方言帰属の判断基準にさえなっている。論者は最初にこの点に注目し学界に報告した。彼の報告はその後他の研究者により詳細に検証されている。

2) 従来チベット語にはラサを中心とする中央方言、中国青海省を中心に話されるアムド方言、チベット東部から四川省を中心に話されるカム方言があるとされてきた。論者は、アムド方言とカム方言の移行地域に、語頭の子音結合も声調の区別も有するという点で両者の性質を併せ持つ方言が存在することを確認し、4つめの方言としてヒャル方言の存在を提唱している。

3) 山西走廊地域に話されている方言が、相互にどのように相違するかを、発音や語彙といった言語特徴ごとに方言地図を作成することによって如実に示すことができた。論者が作成した100枚近くの方言地図から読みとることができる言語特徴の分布は複雑で、単純な方言連続体をなしているわけではないことが判明し、この間に複雑な成立背景があったことがうかがわれる。

4) 『西番訳語』のうち、チベット語の方言を記録している4種類について、論者が調査した方言とどのような関係にあるのかを考察した。その際、先行研究の研究方法を改め、音写に使われた漢字音として北京官話の発音ではなく、四川で話されている西南官話の漢字音を利用した。当時、北京から派遣された役人ではなく、現地の人が記録にあたったという事態を考慮した処置だが、結果としてより現実に近い音価を推定できるようになった。そして、既存のチベット語方言に関する知識では説明できないとされていた語彙形式が、西南漢字音を使って推定された再構形と、論者が収集した方言の形式を利用することによって合理的に説明できること、またそれによって250年前に実在した形式と現在の形式を比較してその間の変化を考察できることを明らかにした。

以上のように、論者は従来十分な調査が行われてこなかった地域で多数のチベット語方言を自ら調査し、その資料に対して多角的な分析を行った点で高く評価されるであろうし、その成果は後々利用されることになるであろう。

しかし、短期間のうちに多くの作業を行ったことから当然予想される通り、改善を必要とする部分が残されている。例えば個々の方言の記述はおおむね音韻体系と語彙に限られ、文法体系には及んでいない。むろんそれらの問題点の解決は、論者が研究者として今後の課題とすべきものであり、本論文そのものの価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2007年1月31日、審査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。